

## かわさき文学散歩 明治から昭和初期の川崎風景

古くから盛んだった「川崎大師」への参詣、田園風景を求めて移り住んだ作家たちの見聞など、明治から昭和初期の川崎の情景を描いた作品をご紹介します。

タイトル	著者	出版社	出版年	掲載 ペー ー	◆:内容 ●:川崎に関する記述
江戸東京《奇想》徘徊記	種村季弘	朝日新聞社	2003	P40	◆博覧強記で知られる著者が30の街を紹介。江戸や明治を偲ばせる、町の姿を案内。「川崎・大師河原の水鳥(すいちょう)の祭り」の魅力について語っている。 ●大師河原の水鳥の祭りには有名な別名(酒合戦)がある。巻末には奈良茶飯の浮世絵や祭りの写真が掲載され、その様子がうかがえる。
エピキュールの丘	河上徹太郎	講談社	1956	P225 ほか	◆柿生に在住していた著者による随想集。親交のあった小林秀雄、井伏鱒二、吉田健一などのエピソードを紹介し、文壇の交友録としても楽しめる作品。 ●柿生の鳥獵や風物の項もあり当時の地域の様子がうかがえる。
エルギン卿遣日使節録(新異国叢書9)	ローレンス・オリファント	雄松堂書店	1968	P174	◆イギリスの旅行家であった著者が、題にあるエルギン卿(日英修好通商条約締結の外交官)の私設秘書として来日した際の記録。 ●1858年8月24日に大師参詣をしており、外国人の視点による当時の情景がよくわかる。川崎大師へ遠乗りに出かける記事もあり。
修学旅行の記 (芥川龍之介全集21)	芥川龍之介	岩波書店	1997	P25～	◆龍之介が東京府立第三中学校1学年のとき、大森・川崎方面に修学旅行をした時の作品。 ●川崎大師に参詣し、「参詣人引きもきらず」とその賑わいの様子を記述している。参詣後、川崎停車場から帰宅した。
水曜手帳(昭和15年11月) (柳田國男全集30)	柳田國男	筑摩書房	2003	P343 ～	◆國男が時間の取れた水曜日に、近郊を巡った時の思索をしたための随筆。神奈川新聞に掲載されていた連載随筆をまとめたもの。 ●昭和15年当時の麻生区王禅寺の農家や寺の描写がある。また、柿の「禅寺丸」の名の由来について触れた記事もある。

断腸亭日乗 (大正13年12月29日) (荷風全集21)	永井荷風	岩波書店	1993	P301	◆荷風の大正6年から昭和34年の死の前日までの日記。激動期の日本の世相とそれに対する批判を、詩人の季節感とともに綴っている。 ●大正13年12月春のように暖かい日の午後、荷風がふらりと川崎大師に参詣した時の日記である。川崎大師参詣後、塩浜の海辺まで歩いた時の様子が記述されている。
ちいさい隅	大仏次郎	六興出版	1985	P7～、 P182～	◆新聞の連載随筆をまとめた1冊。収録の「つきかげ」「夏休み」は、川崎に母の実家があった大仏が夏休みに訪れた当時の思い出や、川崎の様子を綴った一遍。 ●祖母の家が堀之内にあり、当時の川崎は宿場町としての用がなくなり、かえって寂れていた様子。また、東海道から横路地に入るとすぐに畑で、農家が散在していたという。
痴人の愛 第23章	谷崎潤一郎	新潮文庫	1990	P263	◆質素で凡庸な田舎育ちの河合譲治は、ナオミという15歳の美少女に会う。理想的な女性に育て、いずれは妻にしようと考え二人で暮らし始めるがやがて2人の関係は逆転、譲治はナオミに翻弄されてゆく。谷崎が私小説と述べた作品。 ●譲治と同じように彼女に魅かれていた知人と2人、鍋をつつきながら話をする場面で、川崎の肉屋が登場する。
停車場 (日本プロレタリア文学集16)	中野重治	新日本出版社	1984	P100	◆東京駅から桜木町へ向かう列車の片隅で一組の男女が並んで腰かけ話しをする。女は「三・一五事件」で潰された組合の再建のため闘っている弟を訪ね、東北の婚家を出てきていた。偶然車中で会った男の話から、労働者の闘いの現実が浮彫りになる。 ●川崎を列車が通るとき、このあたりは関東地方最大の工場地帯だと説明されている。
田園の憂鬱(岩波文庫)	佐藤春夫	岩波書店	1951	P110～	◆都会の息苦しさを逃れて寒村に移り住んだ青年の心象を描いた散文作品。著者の居住した柿生に近い農村が舞台となっている。風物の牧歌的な美しさが青年の鋭敏すぎる感受性を通して描かれる。 ●王禅寺近辺で見かけた糸とり娘の姿、王禅寺で飼われていた犬のエピソードなども触れられている。
都築ヶ丘の風物 (ふるさと文学館17)	河上徹太郎	ぎょうせい	1993	P583	◆著者の居住した柿生、片平の風物を主題とする随筆。舞台を同じくする佐藤春夫の『田園の憂鬱』を引用・紹介しつつ、都築ヶ岡と呼ばれた丘陵の魅力や、二匹の猟犬を伴う狩猟の様子を中心に生き生きと描く。 ●王禅寺に由来する「禅寺丸」など川崎の産物にも触れる。

東京新繁盛記 (新日本古典文学大系 明治編1)	服部撫松	岩波書店	2004	P62	◆新橋駅の描写に始まる鉄道(蒸気機関車)の説明、および車中の人々の様子を、独特のリズムを感じさせる文章で生き生きと描写した作品。 ●「新橋鉄道」と題して、新橋から川崎を經由して横浜に至る鉄道について書かれている。川崎大師に参詣する老婆と、その孫と見られる娘のエピソードもある。
年月のあしおと (講談社文芸文庫 下)	広津和郎	講談社	1998	P150	◆野間文芸賞および毎日出版文化賞を受賞した、著者晩年の自伝的な文壇回想録。主に大正から昭和にかけての時代風俗や、親交があった作家たちの風貌を伝える。 ● 関東大震災の夜に徒歩で通過した川崎で、街道筋の藁葺き屋根が落ちていたとの記述がある
百鬼園日記帳 (内田百閒全集 3)	内田百閒	講談社	1979	P386	◆大正6年から大正11年にかけての日記。祖母や子供たちが体調を崩すたびに医者を呼びつけ、看護婦を雇い、借金を重ねるなど、悩みの絶えない百鬼園先生の日常が綴られている。 ●大正8年4月13日、妻と子供たちをつれて川崎に遊びに行き、そばやで昼食をとって帰ったことが書かれている。
文明病患者 (現代日本文学全集70)	武林無想庵	筑摩書房	1957	P149-153	◆医者から気の病と診断され、読み書きを禁止された夢想庵が、友人の辻潤を飲み誘うため川崎を訪れた際の、著者の内的記録。 ●その場で知り合った30歳くらいの文士と川崎で酒を飲み、留守だった辻潤の代りに彼を誘って川崎から銀座へ飲みに行く、という場面が描かれる。川崎の労働者の宿泊所のことにも触れている。
武蔵野	国木田独歩	岩波文庫	2006	P28~	◆武蔵野の趣き、季節によって姿を変える落葉樹の風景の美しさを、自身の日記、友人からの手紙、ツルゲーネフが樺の林を描写した文章などを引用しながら、当時の話し言葉で表現した短編。 ●友人からの手紙の中に武蔵野の範囲について考えを述べている一節があり、丸子、登戸、二子などの地名が挙げられている。

めし(新潮文庫)	林芙美子	新潮社	1954	P194, p204 ~	◆著者の代表的長編小説。親を捨てたような形で結婚したにもかかわらず、初之輔との夫婦生活に倦怠を感じている三千代。奔放に生きる姪の里子の来訪によって、夫との関係はよそよそしさを深めていく。 ●著者が横浜市鶴見区矢向に住んでいたことがあり、川崎の駅前大通の描写や、職安の前を歩いたなどの記載がある。
野心 (荷風全集2)	永井荷風	岩波書店	1993	P15	◆蓑島光太郎は老舗の半襟問屋の若旦那として、財産の全てをつぎ込み新たな事業を興そうとしていた。その野心のため老舗を守ろうとする母親・親族と対立し、妹に思いを寄せる奉公人をも放逐。が、商会開店の直前、光太郎に商会放火の報が入る。 ●鉄道にて川崎を通過した際の、車中風景や窗外風景が描かれる。
忘れえぬ人々 (明治の文学22)	国木田独歩	筑摩書房	2001	P52	◆“忘れえぬ人”とはどのような人物だろうか。多摩川に近い宿屋亀屋において、偶然となり合わせた若い文学者と無名の画家が話をする。文学者にとっての“忘れえぬ人々”が語られていく。 ●溝口付近、現在は失われた亀屋が舞台。島崎藤村の揮毫による石碑が、旧亀屋前にあったが、現在は高津図書館前に移設されている。
半七捕物帳 「大森の鶏」 (半七捕物帳 巻の四)	岡本綺堂	筑摩書房	1998	P361 ~362	◆人気シリーズの時代小説。大師参詣の帰りに半七は見覚えのある女と渡し船で同乗し、道中の茶屋で女が鶏に襲われるのを目撃する。鶏の執拗な攻撃を不審に思いその謎解きに乗り出すと…。 ●半七は川崎大師へ毎正月参詣しており、「昔(江戸後期)と今(明治)では参詣の様子が変化した」と語る。11代将軍が参詣してから庶民の川崎大師参詣が盛んになり、汽車ができた明治には参詣者がより増えたなど、史実に即した川崎大師の描写がある。